

怪石記

来信 《例の玄関先の石を、池の正面に据ゑました。この前の時はお招きしたのに来駕を得ませんでした。池をへだてて見る巨石の姿もまた格別です。この度は是非見ていただきたいものです》

この前招かれた時、実は僕は行つたのだ。門を入つて玄関に至る砂利道を歩いた。玄関横に置かれたその石を目にした。初夏の夕暮であつた。頭上で木の枝がしなやかにゆれてみた。色づいた空が見上げられ、若葉から濃い緑に切りかへた葉は、やや黒ずんで無数の葉脈も息づいてゐるかのやうであつた。ところが、僕はその石を目にした次の瞬間には、石の方に走りはじめてゐたのだつた。僕の意志からではない。気がついたら走つてゐた。僕の足首から下が、きゅつきゅつと動いてゐたのだ。足だけがむしやうにいそいだ。僕の頭と肩とが間にあはない。うつかりすると上体が後ろにひつくりかへる。僕は夢中になつて石に向つて突進してゐた。僕はしばらく気を失つてゐたらしい。僕が気づいた時、巨石の下であぐらをかきやうにしてうづくまつてゐた。額に手をやると血がにじみ出てゐるやうだつた。泥にまみれた洋服。手首には青い内出血。丈余の巨石と正面衝突をしたのだらう。縞模様の石を下からつくばひのぼんやりした光が照らし出してゐた。そつと僕は玄関先を辞した。

街を歩いてゐて、人ごみの中で、僕は石のことを考へた。すると、僕の足首はものすごい勢ひで交互に動きはじめた。アスファルトの道の上で転倒しない為には、全身が足首に追ひつくより外に方法はない。道のつづく限り、僕は全速力で歩いた。一時は地の果てまで行くのかと思つた。仕方がないので、石に似た頑丈な塀に激突して、僕はとどまつた。夏の夕方だつたので、赤い夕日と影とのもつれあふ中を、汗を流して走つたことを覚えてゐる。靴は両方ともどこかへ飛ばしてしまつてゐた。ビルディングの階段を昇つてゐる時、僕は石のことを考へた。僕の足首はものすごい勢ひで交互に動きはじめた。階段の途中で転倒しない為には、全身が足首に追ひつくより外に方法はない。階段のつづく限り、僕は全速力で階段を昇つた。屋上に出て、屋上のさらに上に続いてゐる階段に足をかけた。一時は天にも昇るのかと思つた。屋上のタンクの所で、ふと足首はとどまつた。靴は両方ともどこかへ飛ばしてしまつてゐた。

僕は石のことを考へてはいけなかつたのだ。病院の廊下を石のことを考へながら歩きつづけた。しかし、僕の右足にも、左足にも重い鉛の玉がぶら下げてあるので、どんなに石のことを考へても大丈夫だつた。

僕は友人の招待を心よく受けようと思つてゐる。さう思ふと、僕の足首はやや変調を示しはじめた。しかし、現在の僕は自分の意志で足首をとどめることが出来る。僕の意志が足首をとどめることが出来たのに、僕は自分が石のことを考へはじめると、自分自身の全体が石に向つて走りはじめてゐるのを感じる

池の正面に据ゑられた石に打ちよせる小さい波。あをみどろがまきつくやうによどんで、

こつてりした池の水。僕が鯉になつて、石にとびかかつてゐる。僕は頭を打ちくたくやうに、石に向つて突進してゐる。夜も昼も。僕はもう自分が鯉になつてしまつた。がむしやりに巨石に何度も向つて突き進んでゐる。

返信 《あなたの庭の池が、どんなに素晴らしくなつたか、是非拝見いたしたいものです》